

立命館土曜講座

2018年10月テーマ

加藤周一歿後10年記念：加藤周一を引き継ぐために

企画：加藤周一現代思想研究センター

10月6日(第3252回) ※会場は以学館IG101(1号ホール)となります。ご注意ください。

第3回加藤周一記念講演会

戦後日本と加藤周一

一般財団法人日本総合研究所 会長
多摩大学学長 寺島 実郎
立命館大学国際関係学部 客員教授 寺島 実郎

10月13日(第3253回)

加藤周一と1934年生まれ世代

——樋口陽一、海老坂武、大江健三郎、西川長夫

中央大学 名誉教授 三浦 信孝

10月20日(第3254回)

加藤周一の平和主義

立命館大学国際関係学部 教授 君島 東彦

10月27日(第3255回) ※会場は以学館IG102(2号ホール)となります。ご注意ください。

加藤周一のパリ——思索的逍遙

立命館大学文学部 特任教授 中川 成美

【共同企画展示】主催 加藤周一現代思想研究センター、東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター
「君たちはこれからどう生きるか：丸山眞男と加藤周一から学ぶ」
第Ⅱ期8/2-9/20(OIC) 第Ⅲ期9/26-11/22(衣笠) 第Ⅳ期11/28-12/20(BKC) ※詳細は図書館HPをご確認ください。

末川記念會館

日時：土曜日 14:00～16:00 ※6日のみ14:00～17:00

会場：衣笠キャンパス 末川記念會館 SK101(講義室)

参加費：無料・事前申込不要

主催：立命館大学衣笠総合研究機構 TEL：(075)465-8224

共催：加藤周一現代思想研究センター、立命館大学図書館

※当日の入場状況によって、立ち見のお願い又は入場制限をさせていただく場合がございます。
あらかじめご了承ください。

立命館土曜講座

土曜講座がより

題字：故末川博名誉総長

第505号

2018年9月11日発行

立命館大学衣笠総合研究機構
〒603-8577京都市北区等持院北町56-1

加藤周一歿後10年記念：加藤周一を引き継ぐために

企画：加藤周一現代思想研究センター

10月6日 第3回加藤周一記念講演会 戦後日本と加藤周一

一般財団法人日本総合研究所 会長
多摩大学 学長
立命館大学国際関係学部 客員教授 寺島 実郎

10月13日

加藤周一と1934年生まれ世代——樋口陽一、海老坂武、大江健三郎、西川長夫

中央大学 名誉教授 三浦 信孝

加藤周一(1919-2008)は戦後日本を代表する知識人のひとりです。しかし専門をもたないことを専門とした加藤は、東大法学部教授だった丸山眞男(1914-1995)と違って直接の教え子がいないため、その知的遺産を受け継ぐ者が散らばっています。私がひそかに恐れるのは、戦後、京大人文研の共同研究を牽引し多くの弟子を育てた桑原武夫(1904-1988)でも、没後30年の現在ほとんど読まれなくなったのと同じ運命を加藤がたどることです。

この講座では、加藤周一の人と著作に親しみ、加藤との対話を通して知的形成をとげた四人の作家・知識人をとりあげ、加藤周一の知的遺産が後につづく世代によってどう引き継がれてきたかを検証したいと思います。その四人とは、いずれも1934年生まれでフランスに学んだ樋口陽一、海老坂武、西川長夫、そして大江健三郎です。大江さんだけは1935年1月生まれですが、東大仏文で海老坂武さんと同学年です。

彼らのあとを継いで21世紀に加藤周一の知的遺産を継承し発展させることができるのかが、問われます。

10月20日 加藤周一の平和主義

立命館大学国際関係学部 教授 君島 東彦

2004年、立命館大学国際関係学部に着任したとき、かつて加藤周一が客員教授をつとめた学部に勤務できることをうれしく思った。高校生、大学生の頃、加藤周一はわたしのヒーローだった。

加藤の生涯を貫くテーマは「日本文化とは何か」という問題である。このテーマは一見政治的でないようにも見えるが、実は政治と深くかかっている。アジア太平洋戦争(1931-45、加藤は12-25歳だった)という「ばかげた戦争」は、いったいどういう文化によって可能になるのか。加藤は、生涯をあげてこの根本問題に答えようとしたのである。

加藤は、米国のジャーナリスト、I. F. ストーン(1907-1989)のように、少数派・独立派であり、それゆえに透徹した観察眼を持ち、日本政府の政策に対して無力であったが、しかし日本の軍事化、米国の戦争への加担に対して批判的に発言した。

2004年、84歳のときに、加藤は「九条の会」の呼びかけ人に加わった。アジア太平洋戦争への応答が日本国憲法9条であり、この戦争を傍観した知識人=新しき星重派を批判した加藤は、9条改憲の動きを傍観できなかったであろう。それは倫理の問題である。

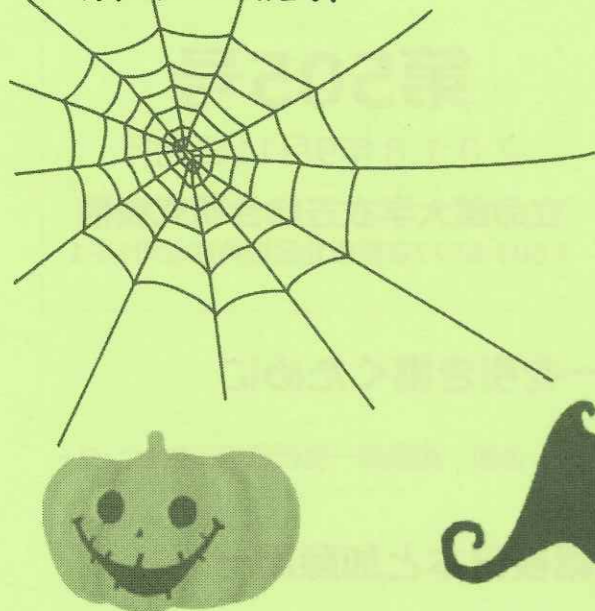
今回、「加藤周一の平和主義」について考え、話をする機会を与您にいただき、ありがたく思う。

10月27日 加藤周一のパリ——思索的逍遙

立命館大学文学部 特任教授 中川 成美

加藤周一が極めて純正な日本の進歩的知識人として、その生涯を全うしたことは、驚嘆に値することだと思います。日本の思想界や論壇が、決して完全に開かれたものとは言い難い状況の中で、その方向を一貫して堅持できたのは、稀有のことといってよいでしょう。加藤にそれが許されたことの大きな原因の一つに、日本に定住することなく世界を回りながら、主に日本文学や文化を教えていたことを挙げていましょう。私の海外の大学で教える時に、彼の『日本文学史序説』の各国語訳が、「正統」な日本文学史として、広く受け入れられていることに何度も遭遇しました。〈日本文学史〉として日本で認知されたものをひっくり返すために書かれたこの著が、逆にスタンダードになっていることを愉快にも思いました。しかし、本学に所蔵される彼の資料を見ますと、英語、フランス語、ドイツ語、あるいはイタリア語にいたるまで、細かな注釈をつけて講義ノートを用意していたことを知り、その語学力、博覧強記に驚くとともに、いわば〈日本〉という土壌にのみ執着するのではなく、グローバルな視点をいかに獲得するかという彼の苦闘がしのばれました。彼が初めていった西欧世界はフランスですが、彼の初期の海外体験が、どのように彼の思想を紡いでいったかについてを、今回は皆さんとご一緒に考えていきたいと願っております。

講師のご紹介



三浦 信孝 (みうら のぶたか)

■所属 中央大学名誉教授、日仏会館副理事長

■専門分野 フランス文学・思想

■主な著書・論文

『現代フランスを読む：共和国・多文化主義・クレオール』（単著、大修館書店、2004年）

『戦後思想の光と影』（編著、風行社、2016年）

『ポール・ヴァレリーにおける詩と芸術』（共編著、水声社、2018年）

君島 東彦 (きみじま あきひこ)

■所属 立命館大学国際関係学部教授

■専門分野 憲法学、平和学

■主な著書・論文

『平和をめぐる14の論点—平和研究が問い続けること』（共著、法律文化社、2018年）

『六面体としての憲法9条—憲法平和主義と世界秩序の70年』全国憲法研究会編『憲法問題29』（三省堂、2018年）所収

『平和をどうつくるのか—「戦後」を超えて』（白井聡との共著、メディアアイランド、2016年）

中川 成美 (なかがわ しげみ)

■所属 立命館大学文学部特任教授

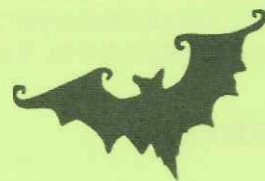
■専門分野 日本近現代文学・文化

■主な著書・論文

『戦争をよむ—70冊の小説案内』（岩波新書、2017年）

『山田美妙集』第7巻、校注、解題、（臨川書店、2018年）

『モダニティの想像力—文学と視覚性』（新曜社、2009年）



聴講者の広場



2018年8月テーマ

平和創造に向けたスポーツの役割とは何か：
オリンピック、パラリンピックの意義を考える

障害者スポーツに対するステークホルダーが持つ、ダイバーシティマネジメントの観点から、①「分離」→「統合」のボーダー②無意識の「同化」が日本における課題であると、講義を聞いて感じました。スポーツに限らず、障害を持つ方に対する健常者の意識改革として、果たして、パラスポーツ＝競技スポーツの高度化のみが、有効な手段であるのか？講義を通して再び考えてみたいと思うキッカケになりました。

本日の内容とは、直接関係は無いですが、日本人のマナーの良さ、助け合いの精神など、日本人の美德としてきたものが失われつつあると感じます。2020年のオリンピック・パラリンピックを目前に控え、世界の方々に日本の良さをお伝えするためにも、早急に「日本人のあるべき姿」に戻していかなければ、このままどんどん失われてしまうと感じます。公共交通や街づくりなどに活かせる知恵や具体的な活動などの情報をご発信いただければと思います。ユニバーサルデザインを叫ぶだけでは実現しない「人づくり」の面での活動の必要性を切に感じます。

昨今、社会的に話題となっているスポーツの不祥事から始まり、スポーツとは何かという「そもそも論」をイギリス社会から分かりやすく学びました。軽快なトークとユニークな例で楽しく聞けました。

スポーツハラスメントの原因にもなっている”過剰同調”ですが、なぜ”過剰同調”をしているのか？を考えた時、メディアが大きく影響していると考えました。それに感動した人たちは、知らず知らず身の回りの人にも同じように求めてしまい、感覚が逸脱してしまうのが原因ではないかと考えました。

また、監督やコーチ・メディアによる過剰同調が無くならない限りスポーツハラスメントやパワーハラスメント等は根絶しないだろうなと思いました。

